

来迎会と地獄芝居

——房総の念仏芸 二

三隅治雄



## 建曆寺の菩薩面

房総半島の西部、東京湾に面した君津市の浜子に音信山釈迦建曆寺という古刹がある。現在、新義真言宗豊山派に所属するが、遠く奈良時代、僧行基の創建になるものと伝え、のち平安時代の天延二年（九七四）、多田満仲が、この地で歿けられた清和天皇第三子貞元親王の菩提を弔うため浄土教普及の先達として名高い恵心僧都源信を招いて再建せしめたと伝える。

建曆寺の名は、鎌倉時代の建曆年間（一二二一～一二三〇）、かねて崇敬を寄せていた執権北条氏が朝廷に奏上して年号にちなむ寺号を賜わったことによるといい、のち戦国時代の天正年間（一五七三～九二）には、徳川氏より朱印十五石を受けることになった。

現在、この寺に古い菩薩面三つと、菩薩面の左耳あたりの断片が一つ保存され、いずれも恵心僧都作と伝えているが、仮面は松の一枚製で、表面は漆箔をほどこし、裏面は黒漆を塗っていて、彫りも彩色もよくなかなかの逸品である。もっとも、恵心作というのは伝説で、実際の製作年代は鎌倉期らしく、田辺三郎助氏によれば「その手法はまさに鎌倉時代の上手の仮面製技法になるといってよいであろう」（注一）というもので、そして断片一箇は「これに接する顔面左半部が南北朝頃に補われており、この時期にも使用されていたことが想像される」（注二）というものであった。

これらの菩薩面はかつてこの寺で行なわれた来迎会にもちいられたものという。

来迎会は、一般に迎講むかえこうとも練供養などもよばれる儀礼で、恵心僧都が創始したものと伝えるが、その内容とするのは『阿弥陀経』『観無量寿経』等という、人のまさに死に臨もうとするとき、阿弥陀如来が観音・勢至の両菩薩を従えて枕頭におもむき、かれの手を親しく取って浄土に導くという教えを、立体的な一編の楽劇的祭儀として演出したものである。

創始当時の儀礼の様子は『今昔物語』などに記されているが、それによれば、阿弥陀仏や観音・勢至などに扮した者が、手に金蓮華や紫金の台を捧げつつ、笙・笛などの楽と念仏の斉唱につれて、浄土からはるばる来臨するおもむきで行道し、待ち迎えて礼拝する念仏信者の手を取って元の浄土へ帰っていくさまを見せるという構成のものであった。恵心は、あらかじめ念仏信者を集めて講をつくらせ、講員相互が仏・菩薩に扮したり、楽を担当したりして、こうした儀礼を随時に行ない得るよう指導した。これを迎講むかえこうとよんだが、この祭儀がまず京都の六波羅密寺や雲林院あたりでもよおされ、のち恵心の生まれ故郷である大和当麻の当麻寺や大阪の四天王寺などでも、参詣する信者たちに阿弥陀引接の教えを広く知らしめるために行なうようになった。何より見る者にとって、生きながらにして阿弥陀仏や観世音菩薩の慈悲の尊顔に接しられる思いのすることがありがたく、しかも、濁々たる節まわしの来迎和讃や壮嚴な楽の音がバツクにかなでられるとなれば、感情の昂揚もひとしおで、迎講を見て阿弥陀に帰依する民衆も増えたとみられる。

菩薩面をかぶっての行道が盛行するようになったのは鎌倉時代ごろのようだが、関東では、いまに残る伝承からみると、建曆寺あたりが、もつとも古いようだ。関東の他県でいまま来迎会を伝承しているところは、東京奥沢九品仏の浄土宗寺院浄真寺であるが、ここは寺の創建そのものが江戸時代の延宝六年（一六七八）で、来迎会の始行も当然それより下ることになる。また、やや離れるが長野県小諸市平原の時宗寺院の十念寺にも、いまは中絶状態だが二十五菩薩来迎会が伝えられており、ここにも恵心作という菩薩面が現存するが、実際の仮面の製作は室町期あたりらしく、また、県内の鴨川市貝渚の寿慶山心厳寺でも二十三の菩薩面が現存して、昔二十五菩薩の行道を行なったとの伝承を残しているが、仮面の製作は室町末期を遡らぬという。（注3）

建曆寺の来迎会については、江戸時代の文化十四年（一八一七）十二月、当時の住持饒慶から依頼を受けた塙保己一がみずから撰して弟子の屋代弘賢に書かせた『建曆寺縁起』に次のような記述がみえる。

（前略）又毎年六月晦日当寺にひとつの法会ありて親王の冥福を回向す その夜老若と云はず男女を論ぜず手をあげ



足をふみておとりつゝ念仏す、これ恵心僧都此の国に下り給ひし時かつハ親王の菩提をかさり かつは凡夫の出離の為なりとて此事を始行ひ給ひしが 今関東諸国にひろまりぬれど当寺を以ておとり念仏の最初とす 今もおとりぬふつの具とて廿五菩薩の面三のこれり。(以下略)(注4)

右の記事を見ると、当寺の踊念仏には「男女を論ぜず手をあげ足をふみておとりつゝ念仏す」という行儀と、菩薩面を顔に当てて二十五菩薩の行道を見せる行儀の二種があったようだ。現に仮面の方は前記の三つの古面以外に近世出来のものと思われる菩薩面が保存されていて、江戸時代を通じてこれが行なわれていたことがしのばれるが、土地の故老の伝では明治二年(一八六九)までもよおされていたといひ(注5)、『君津町誌』(注6)には「或る古老の話によると……」として、往時の踊念仏の模様を次のように記している。

或る古老の話によると、この法会は建曆寺の字 東向に堂(敷地約三畝歩位の堂跡あり)があったといわれ、そこで山伏・楽人・別当・菩薩衆とも衣裳・装束(菩薩面をかぶり僧衣をまとう)をつけて堂わきより、道をはさんで丘陵中腹にあった天皇さまの社にお詣りして下道に下り、行列をととのえてお練りにうつるのである。

行列の先頭はほら貝、笙(山伏)を吹き、次に銅羅、鉦、太鼓(楽人)がつづき、その後は別当職(祭主)菩薩衆(菩薩面をかぶった僧)念仏衆、一般参詣人とつづき三百余米の道を練って、阿弥陀堂にはいるのである。阿弥陀堂にはいった別当職や、菩薩衆は敵そかに法要を営み終って一応外に出て、外廊や、堂の周囲を念仏を唱えながら行道する、終って念仏衆をはじめ、一般参詣人は踊念仏に興ずるのである。

右は、町誌編集委員が、土地の故老の断片的な懐旧談をいろいろ引き出して浮かび上がらせた昔の来迎会の一部始終であるが、このうち、祭儀に山伏が参加するのは京都泉涌寺即成院の二十五菩薩練供養などにもみられることで、大和の当麻寺の練供養では、二十五菩薩の行道の前に、極楽堂で一山内の真言宗・浄土宗僧侶がそれぞれに読経法要をいとなむ。来迎会が、顕密両方からの支持のもとに伝承されてきたことの、一例である。

## 浄福寺と迎接寺

建曆寺の踊念仏は、明治二年をもって止む。山伏の退転などが原因であつたらうかと思うが、しかし、これだけの歴史をもつた儀礼が、長い年月、他に影響を及ぼさぬままで過ぎたともおぼえぬ。

じつは、房総地方をみると、恵心留錫の地と伝え、あるいは恵心製作の仮面、画像を保存するという寺院が他にもあり、そして、その中に、来迎会が源流となつたとみられる宗教芸能を伝承してきた寺が二カ所存在するのである。両者共、いまその芸能を行なわずになつてゐるが、その一は、香取郡小見川町下小堀の浄福寺であり、一は、同郡下総町冬父ふの迎接寺である。

いずれも浄土宗寺院であるが、浄福寺は鎌倉光明寺派に属して巨徳山光明院と号す。開山は浄土宗第三祖で鎌倉光明寺をひらいた良忠上人（一一九九～一二八七）と伝え、寺伝の『鬼来迎問答脚供養由来記』（正和五歳辰（一一三二）三月浄福寺十一世良光との奥書がある）によると、建長二年（一二五〇）に開山として迎えられた良忠上人が、墮地獄の恐怖とその苦患を救いたもう仏菩薩の慈悲のありがたさを民衆に広く知らしめるために、恵心僧都源信の製作にかかる菩薩面十二と地獄の冥官たちの仮面を用いての脚供養を考案し、やがて建長四年（一二五二）春に、公開したという。安政二年（一八五五）の序文のある赤松宗旦の『利根川図志』巻五によれば、これは二十年に一回のもよおしであつたらしいが、現在、寺には、正徳二年（一七二二）二月に上演したときの台本を記した『鬼来迎問答引接脚供養記』（浄福寺三世住職応誓記述）と、上演時に用いた三十三箇の仮面と衣裳若干が保存されている。

一方の冬父の迎接寺は、浄土宗名越派円通寺の末寺で、冬父山三世院と号す。寺所蔵の『冬父山由来記』によれば、平安朝初期の弘仁年間（八一〇～二二）、土地の領主神崎多五郎入道政吉が創建して開山に弘法大師を迎え、真言密教の道場として栄えたが、長徳三年（九九三）、恵心僧都が来てしばらくとどまり、阿弥陀仏の座像を彫刻して、その胎内に

弘法大師の尊像をこめて本尊となし、また仏面・鬼面十三個を彫刻して「鬼面判断法会」なる宗教劇を創作したといふ。

寺はその後、戦国時代の天文年間（一五三二～一五四四）に至って、浄土宗名越派大沢流の祖良栄上人（二三四二～一四二八）の開いた下野国芳賀郡益子庄大沢村在の円通寺の十世良迦上人の嫡子良晃上人が住職となり、以来円通寺の末寺として宗派活動を続けた。その間「鬼面判断法会」は、三十三年に一回行なう仮面開帳の折りに上演するならわしとなり、明治以後は明治十年（一八七七）、大正五年（一九一六）、そして昭和二十二年（一九四七）と演じてきた。ただし、上演台本は、大正五年の御開帳のあとどちらかへ紛失し、そのため昭和二十二年のときは、東京小石川在住の八百谷順応氏に依頼してつくった「鬼面判断劇」を放まわりの役者をやとって上演したという。現在、恵心の製作と伝える仮面十三箇と、衣裳類を寺内宝庫に保存している。

#### 「鬼来迎問答引接脚供養」

さて、浄福寺・迎接寺それぞれの劇の内容についてであるが、その台本は末尾に対照表としてまとめて載せているので御覧いただきたい。

そのうち、浄福寺の「鬼来迎問答引接脚供養」の構成は次のような運びになっている。

- ① 閻魔大王を先頭に、悪俱生神・善俱生神・奪衣婆・懸衣翁・奪精鬼・奪魂鬼・阿防羅刹・伝死鬼・牛頭鬼・馬頭鬼が次々に出て着座する。
- ② 人間界から送られてきた罪人が死出の旅路をあゆみながら嘆く。
- ③ 獄卒たちが出て罪人を責める。第一、第二、第三と呵責が続く。
- ④ 三途河の奪衣婆が罪人の衣服を剥ぎ、懸衣翁がその衣を樹に掛ける。

⑤閻魔大王の前に罪人が引き出されて生前の罪の裁判を受ける。悪俱生神が鉄札で罪人の悪行を、善俱生神が金札で善行をしらべ、そして浄玻璃の鏡に映し出された罪人のかずかずの悪行をみて閻魔大王がその罪科を判じ、かれを無間地獄へ追いやる。

⑥観世音菩薩が出現し、無間地獄に追い落されて苦しむ罪人を見て、呵責する鬼と問答し、さらに閻魔大王を説き伏せて罪人を救う。そして奪衣婆から衣服を取り返して罪人に与え、阿弥陀仏の慈悲と念仏の功徳を説き聞かせて、かれを西方浄土へ導く。

⑦音楽を奏するなか、諸菩薩があらわれて罪人を極楽へ引接するさまをみせる。

右のうち、全般の量からいえば、地獄での鬼の呵責や閻魔たちの裁判の描写のシーンが大部分を占めるが、この劇が目目としているのはやはり最後の⑦の諸菩薩の来迎引接の練りのシーンであろう。劇の題名「鬼来迎問答跏趺供養」の跏趺供養は、大和当麻寺の「聖衆来迎練供養」などと同じく、浄土と娑婆のあいだを群行する諸菩薩のお練りを意味する語で、鬼来迎の来迎ももちろん右の往生を願う人の許へ仏菩薩が迎えに来る意味の、聖衆来迎の語から出ている。

浄福寺の高橋住職にうかがった話では、昔、跏趺供養の舞台となったのは山門脇にある地藏堂で、ここで地獄の呵責や裁判の場面が演じられ、そして最後の菩薩来迎のお練りは、本堂から地藏堂へ掛け渡した橋の上で行なわれたという。

当麻寺の練供養では、二上山を背にする本堂を極楽に擬し、本堂正面約一二〇メートル先きの小堂を娑婆世界に見立てて、そのあいだに二河白道に擬した長い橋を掛け渡す。そして、天人を先頭に無遍身・竜樹以下二十二の菩薩面をかぶった者がまず練り渡り、次いで観音・勢至・普賢の三菩薩が練り渡って、娑婆堂に安置された中将姫像を取り上げ、やがて観音が先頭に立って本堂に還る。つまりは、観音以下の聖衆が極楽往生を願う中将姫のもとに來迎して姫を浄土に導くさまをこの本堂と娑婆堂のあいだの橋の上で演じてみせたのが聖衆来迎練供養である。

こうした形は、中世以後各地寺院で行なわれた来迎会の一つの典型であった。来迎を待つ者が中将姫でなく、主催寺

院の開祖であったり、一般の念仏信者であったりすることは寺々によって異なるが、要は仏菩薩に扮した者が浄土と人間界の二元世界をシンボライズした場所を往来して人を救うさまを演じてみせるのが、来迎会の根本であった。

前述の建曆寺の場合も、橋を掛けたかどうかは不明だが、阿弥陀堂を極楽浄土に擬し、天皇さまと称する社を娑婆世界に見立てて、阿弥陀堂→天皇さま→阿弥陀堂のあいだを菩薩衆が練り歩いたらしい。そしてここでは引接を受ける対象は念仏衆とよばれるグループであったかとみられるが、一方、浄福寺では、浄土が本堂、地獄が地藏堂という見立てで、菩薩が地獄の罪人を引接するという内容でのお練りを行なったのである。

ということは、一般の来迎会では、浄土——娑婆の往来となることを、浄福寺では浄土——地獄の往来という形に変えていることだ。

この演出は、他地方ではみられぬものである。わずかに、長野県小諸市平原の十念寺の二十五菩薩来迎会で、近代では、極楽浄土をかたどる本堂から娑婆をあらわす仮設の舞台に來迎橋を掛け、そこを天人を先導役とした二十五の仏菩薩が渡って、舞台に据えた念仏信者の小像を観音のもつ蓮台に乗せて本堂に還るといふ儀礼だけを行なっているが、昔はその前に、地獄の鬼たちが亡者を責めて連れ去るといふ場面を演じたものという。

となれば、浄福寺の脚供養のシチュエーションと共通してくるわけで、つまり、鬼が亡者を苦しめ墮地獄の恐怖を味わせようとするところへ、間一髪菩薩が出現して亡者を救い、かれを浄土へ導くといふ話の展開である。

この十念寺の練供養が浄福寺の脚供養と実際にかかわりがあつたかどうかは微すべき資料もなくまったく不明であるが、ただ、どちらが先きにせよ、この演出には共通した効果があつた。

すなわち、原型としては、観音・勢至などの聖衆が列をなして行道し、冥界に入ろうとする人を救って浄土に引接するという儀式があつたわけである。が、それだけではいま一つ説得力に欠けるとして、極楽からの聖衆の来迎に對して、地獄からの鬼の来迎を対照的に見せた。すなわち、死におもむく者をいち早く地獄の鬼が迎えに来て、三途の川か

ら閻魔の庁へと引立てていく。恐怖におびえる亡者……と、そこへ菩薩がさっそうと現われて鬼たちを押え、亡者の手を取って浄土へいく、という演出である。

それはあたかも、絵画に、仏菩薩の来迎のすがたを描いた聖衆来迎図がある一方、対照的に地獄のこわさ苦しさを水火二河の阿鼻叫喚の絵に示しつつ、その河を渡ろうと一筋の白道を歩む人に向かって彼岸から引接の手招きをする阿弥陀の慈悲のすがたを描いた二河白道図のつくられたことにも似ている。

二河白道図は、娑婆世界にすむ人々ことごとくを美しい極楽浄土へ導きたもう阿弥陀仏のありがたさをわかりやすく説き聞かせ、これを掛軸にして一つ一つさし示しながら、地獄のこわさ、むごたらしさを説き、人々の恐怖心をあおりつつ、だからこそ常時念仏を唱えて阿弥陀仏におすがりなさいと解説する……そういう一般大衆を啓蒙するためにつくられたいわゆる絵解きの具であった。

十念寺や浄福寺の、菩薩の練供養の前に鬼の呵責のシーンを見せる演出を行なうようになったのも同じような意図からであろう。特に浄福寺では、単に鬼を出すだけでなく、閻魔大王以下十一人に及ぶ地獄の冥官を繰り出して、鬼たちの呵責、三途河の姫の衣剥ぎ、閻魔の裁きなどの場面を多彩に展開させていき、遂に罪人が追いつめられたときになって観音が登場し、さらに菩薩衆が来迎してかれを浄土に導くという、じつに劇的効果満点の教化劇に仕立て上げた。

作者は前記の『鬼来迎問答脚供養由来記』によれば開山良忠上人ということで、かれが恵心作の仮面を活用して、地獄の恐怖と仏菩薩の慈悲の相を広く大衆に知らしめるために創作したというのだが、その点は怪しい。が、この伝承から想像されることは、まずもって恵心が案出したと伝える来迎会が行なわれていたところへ、何者かの戯作性に富んだ教化僧が出て、菩薩来迎の内容をいっそう引立たせる劇的な場面を構成して、それを来迎会の前幕に加えたのだろう……ということである。

一方、西国では、鎌倉時代あたり地獄変とか六道絵などとよばれる地獄の情景をなまなましくえがいた絵画が流行

し、また京都壬生寺では正安二年（一三〇〇）に始行したという融通大念仏会に、本尊延命地藏菩薩の威徳と念仏の功徳を大衆に知らしめるための無言仮面劇を上演するようになったが、その中で、地獄に連れてこられた罪人が閻魔大王から判決を受けて鬼たちに責められ逃げ苦しむところへ、地藏菩薩があらわれてこれを救うという「賽の河原」のような狂言が生まれた。「餓鬼角力」という狂言も、賽の河原で閻魔王や鬼たちが亡者を相手に相撲を取っていじめるのを、地藏菩薩が出て、逆に閻魔をやりこめるといふ筋の曲で、このほか、恵心僧都の弟子定覚がひらいたと伝える京都市上京区千本の引接寺、通称閻魔堂でも南北朝ごろから念仏弘通のための大念仏狂言を始行したといひ、その中で地獄の冥官たちの登場する「閻魔王帳付け」や、地獄の鬼たちが鎮西八郎為朝に打ち据えられて善心にたち返る筋の「千人切」などの狂言を演じた。

このほか能の狂言にも、地獄の呵責や冥官たちの行状をパロディ化したものがいくつもあり、室町期あたり、貴賤を問わず、人々の地獄世界に対する知識も豊富になり、鬼の所行や閻魔王の行状などを演技的に模写することも広く行なわれるようになったかと思われる。狂言の『閻罪人』に、京の祇園会の山鉾の趣向に地獄の鬼の責めの場を取り上げようとして、町の者がその所作を稽古するシーンがえがかれているなどは、その例であろう。

こうした風潮は当然関東の方にも及んでいたかと思われ、民衆の地獄への関心は、一種「こわいもの見たさ」の興味をも含んで、地獄描写の劇を歓迎する傾向が各地に強まったとみられる。

「鬼来迎問答脚供養」のたしかな製作年代は不明だが、その構成と話の運びからみて、六道絵や壬生狂言などの盛行と無関係ではなさそうだ。まずは、それまでであった来迎会の儀礼を母胎にして、それをいっそう効果あらしめる意図で、前段に民間に流布し始めた地獄変相の情景を劇に仕組んだものを据えたのではないかと考えるわけである。

## 「五鬼判断法会」

一方、冬父の迎接寺の「鬼面判断法会」であるが、じつはこの古い台本は前述のように大正五年の上演後失われて、人々の記憶にもとどまらなくなってしまった。江戸時代には僧侶が演じていたものを、明治十年と大正五年のときは役者を外から雇って演じさせたためかと思われるが<sup>(注7)</sup>、そのため昭和二十二年には、まったく別の内容の台本がつけられ、上演された<sup>(注8)</sup>。

筆者が、昭和四十年早々、迎接寺を訪問したときにはこの台本しかなく、当時の住職杉山靈浄氏のお話では、大正五年時の記憶をもとにつくってもらったとのことなので、この新作を通して昔の台本の構成を想像したものであった<sup>(注9)</sup>。昭和五十五年秋、大利根博物館長の平野馨氏から昔の台本が発見されたとの報告を受け、雀躍した。その新発見の台本は香取神宮所蔵の古文書の中からのもので、安政五年（一八五八）、香取郡滑河の青柳宗左衛門義行が書写したものである。記述によれば、迎接寺がたびたび火災にあい、記録が焼失したので、本寺の下野の大沢山円通寺に保管されていた台本を書写して香取神宮に収めたという。

まことに奇篤な心掛けであるが、この記録の表書には「冬父山三世院迎接寺五鬼判断並略縁起写」とあり、台本のほか「冬父山本尊并鬼面略縁起」なる記録の写しを収めている。昨昭和五十六年、この貴重な写本を香取神宮の尾崎保博・伊藤義雄の両氏と大利根博物館の石井保満氏が解説し、その文を下総町教育委員会編集のパンフレット『迎接寺鬼舞』に掲載した。本文巻末の「三寺台本対照表」に記した台本はそれに基づいてのものであるが、この台本の題名は「鬼面判断法会」でなく「五鬼判断」となっている。

五鬼とは、黒・赤・白・黄の五色の鬼であるが、迎接寺ではこの五鬼のほか、閻魔大王と、淨福寺における善悪の俱生神に代わる善悪の童子、それに三途河の姥、幽霊、観世音菩薩が登場する。幽霊が、淨福寺の場合単に亡者を罪人と



しているのに対し、こちらはいちおう南閻浮提の大王の后と特定しているのが変わっている。

構成の次第は次の通りである。

①閻魔大王と善童子・悪童子の出と名のり。

②幽霊の死出の道行。

③黒鬼・青鬼の出現と威嚇。

④三途河での姥の奪衣。

⑤閻魔の庁での裁き。幽霊を閻魔大王の前に引き据え、善童子・悪童子が、金札・鉄札で生前の善行悪行をしらべ、さらに浄玻璃の鏡に映して閻魔大王が幽霊の罪を判じてこれを黒閻天女幢へ押し込めておくように命じる。

⑥はるか人間界で后への追福供養の法要がいとなまれるのを聞きながら大王が罪人を地獄へ送ろうとするところへ、観世音菩薩が出現、大王と問答の末、幽霊を濟度する。

以上の段取りで、まず浄福寺の台本ではかなり丹念な鬼の呵責の描写部分がここでは少なく、その代わり、幽霊の前身を南閻浮提の王后としたことから、その前世の罪の如何についての問答が具体的に、またそれだけ劇的に描写され、かつ、大王と幽霊とのあいだの女人成仏についての論争が熱の入ったものになっている。

このあたりがこの「五鬼判断」の要点のようで、そして浄福寺では一番の見せ場であったはずのラストの菩薩来迎の場面がこちらではなくなっているのが、特異である。浄福寺では「脚供養」と名っているのに迎接寺ではそれを名わずにしているのもそのためかとも思うが、はたして、菩薩来迎の練りの場面が元からなかったのかどうか疑問としたい。

なお、ちなみに、「冬父山三世院迎接寺五鬼判断並略縁記写」に、この「五鬼判断法会」の、永禄七年（一五六四）以来の執行年月日が左のように記されている。「旧記の写」とあるが、永禄七年が始行であったかどうか不明である。

判断法会修行動來の旧記の写

- 一 永祿七年 甲戌 七月十六日 晴天 之修行十日
- 一 慶長元年 戊申 七月十六日 晴天 十日之修行
- 一 寛永五年 戊辰 九月十二日 晴天 十日之修行
- 一 万治三年 庚子 八月廿日 晴天 十日之修行
- 一 元禄五年 壬申 八月十日 晴天 十日之修行
- 一 享保九年 甲辰 三月七日 晴天 十日之修行
- 一 宝曆六年 丙子 三月十三日 晴天 十日之修行
- 一 天明六年 丙午 三月十日 晴天 十日之修行
- 一 文化十三年 丙子 三月廿六日 晴天 七日之修行
- 一 弘化五年 戊申 三月廿日 晴天 七日之修行

右三拾三年に一度宛の開帳也

右のうち、永祿七年の干支は正しくは「甲子」、慶長元年は正しくは「丙申」であるが、これらの記録でみるところ、その伝承は相当に古そうである。したがって浄福寺の「脚供養」との先後関係が問題になるのだが、ただいま一つ、浄福寺と迎接寺を結ぶ線からちょうど逆三角形の頂点にあたる地点に位置する匝瑳郡光町虫生むしゅうの広濟寺という寺院に、同じく地獄の恐怖と菩薩の救済をえがいた「鬼来迎」と称する仮面劇が現に行なわれ、そこではいまはすたれたが、古くは浄福寺に似て、閻魔の庁での裁判や鬼たちの呵責のシーンのあと二十五菩薩のお練りを見せたとの伝承が残っている。すなわち『本朝俗諺志』二の卷廿二の「下総鬼堂」の条に、

「下総国香取郡武生村に鬼堂といふがあり。毎年七月十六日、地獄道の有様、閻魔五道冥官三途川婆、青赤の二鬼を拵へ、罪人を呵責の件、二十五并祢り供養かの罪人救助のまなびあり」

とあるのがそれである。「鬼来迎」の題名も、その菩薩の来迎に由来するかと思われるが、そうとなれば、古く建暦寺あたりに二十五菩薩来迎会が行なわれ、そしてこの広済寺にも同様の来迎の儀礼が、さらに浄福寺でも同種のお練りがもよおされて、両者共にそれに付随させる形で地獄の責めの劇を演じているのを見ると、こうした形がまず先行して、のちに地獄の描写への一般の関心が強まり、またそれに応えるべき演出のくふうが仏者の側で凝らされるようになってから、次第に地獄描写が中心の劇が成長し、いつか本来あったはずの菩薩たちのお練りのシーンが消えてしまう傾向が生まれたかと想像される。迎接寺の「五鬼判断」の場合、当初すでに菩薩来迎行事への関心を薄くして、お練りの場面なしで始まったとも考えられるが、広済寺の「鬼来迎」などは、明らかに当初は菩薩の来迎行事をラストに行なっていたものを、のちに廃絶させた歴史を持っていた。そして注目されるのは「鬼来迎」の場合、お練りの方は絶やしなから、一方ではそのぶん劇の筋立てのくふうや地獄シーンのスペクタクル化へのくふうが時を追って行なわれた形跡のみえることで、いうなら来迎会の演劇化、娯楽化の筋道を「鬼来迎」を通してみることが出来るのである。

### 広済寺「鬼来迎」の変遷

「鬼来迎」を伝える匝瑳郡光町虫生の広済寺は慈士山地蔵院と号し、現在は新義真言宗智山派に属するが、江戸時代の初期までは曹洞宗寺院であるともいい、その因縁であろうか、南北朝期の禅僧石屋真梁（一三四五～一四二三）が関東巡歴の途次虫生に立ち寄り、領主椎名安芸に亡き娘の追善供養をすすめて広済寺を建て、因果応報の理と仏菩薩の慈悲を広く人々にさとらしめるためにこの劇をつくったとの伝承を残している（注10）。

もっとも、この創始譚を語る記録は、南北朝の石屋や戦国時代の記録に出てくる椎名安芸を鎌倉時代の人としたり、あの運慶・堪慶を仮面の製作者に擬したりして史実としての信憑性に欠ける。が、話の全体からは諸国遊行の聖が旅の先々で土地の有力者に法を説いて地藏堂などの一字を建立し、しばらくは滞在して念仏弘通の歌舞を村に残していくと

いった、各地によくみる念仏聖の遊行の行態がしのばれて興味深い。

現行の「鬼来迎」の台本は巻末の対照表に載せているが、その筋立ての次第は次の通りである。

## 大序

①閻魔の庁の場。大王・俱生神・鬼・三途河の鬼婆が次々に出る。冥官たちの顔見世。

②亡者（椎名安芸の娘をあらわす）の道行。

③鬼婆が亡者を押える。

④閻魔大王が俱生神に命じて亡者の生前の罪をしらべさせ、また浄玻璃の鏡に亡者を写してその罪の裁断をする。

## 賽の河原

⑤子供たちの亡者が賽の河原で石積みをするところへ赤・黒の鬼が来て威嚇する。と、地藏菩薩が出現して子供を救う。

## 釜入れ

⑥赤・黒の鬼と鬼婆が亡者を釜ゆでにする。

## 死出の山

⑦地獄の山で鬼たちや鬼婆が亡者をおどし、山へ追い上げ、石で責めたりする。と、観世音菩薩が出現し、鬼と問答してこれを押え、亡者を浄土へ導く。

以上を、前の浄福寺・迎接寺の劇と比較すると、全体としてセリフの部分が省略され、その代わり見た目の効果をねらった舞台づくりの行なわれていることが指摘出来る。亡者の道行の愁嘆とか、亡者と大王・獄卒との激しい問答などがなく、一方、地獄の恐怖を示すのに釜ゆでや死出の山など舞台セットも盛りだくさんなスペクタクルたっぷり演出を用意しているのがそれだ。また前二寺にはない「賽の河原」の場を設けて、鬼におどされる子供とそれを救う地藏菩薩

薩の活躍をえがくが、地蔵和讃をバックに地蔵が一人の子供をかつき、他をうしろに従えて、引込む演出などじつにごとで、創り手の凡庸でないことが痛感される。が、全体的には、序幕を「大序」と称して、そこで劇の役々の顔見せを行なう演出を示したり、終幕で、鬼が卒塔婆をかついで「さては成仏いたせしか」と見得を切って幕切れにするなど、歌舞伎の演出を取り込んだ風も看取される。

これがいつごろからの変容か明らかではないが、なお土地の伝承では、第二次大戦前まで、「大序」と「賽の河原」のあいだに、①和尚道行 ②墓参 ③和尚物語 の三場面を挿入して演じたという(注11)。①禅僧石屋和尚が虫生に来る。②石屋が娘の墓参に来た領主椎名安芸夫婦に逢う。③石屋が前夜辻宮で娘妙西の地獄苦患のさまを眼のあたりにした話を夫婦にして追福供養をすすめる……という筋で、これは広済寺建立の由来を劇に仕組んだもの。登場者すべて仮面をつけず、鬘をかぶり厚化粧をし、セリフも台本を見る限り地芝居そのもので、これは本来から「鬼来迎」の一部分トとして構成されていたものではなく、伝承の過程で加えられたものらしい。地元の土屋義磨氏所蔵の台本(注12)には「鬼来迎本縁起」との表題が付され、台本末尾に「嘉永五<sub>壬子</sub>歳三月入佛之時写置」と記されているところを見ると、あるいは化政期以後の関東各地での地芝居流行の時代に、こうした寺の縁起譚を題材とした芝居が地元民のあいだで仕組まれ、やがてそれを既存の「鬼来迎」に挿入する演出が行なわれるようになったかと想像される。

となれば、「鬼来迎」の変容ぶりは、時代ごとにあざやかだったようである。土地の口碑に、昔、鬼来迎の舞台となつた境内地蔵堂(もとの本堂。昭和四十六年秋、崖くずれで倒壊)から本堂(もとの庫裡)にかけて仮橋が渡され、地蔵が子供の亡者を救っていくときなどにはこの橋を渡ったというが、おそらく二十五菩薩のお練りもこの橋の上で行なわれたのであろう。それがやがて失なわれたのは、歌舞伎の演出や演技の技法が地芝居などを通じて取り入れられ、それが地元民に迎えられたからで、台本も見た日本位の地獄ショウになったし、また、新たな創作場面の挿入も行なわれた。

さらにいま一つ注意をひくのは、文久三年(一八六三)に出た加藤雀庵の『さへづり草』十三に次の記事の見えるこ

とである。

明和年間、いづこの浮屠家の企たることにや知らねど、かの冥府にありとか云ふ、一百三十六地獄の変相を引戯に脚色、或ひは修羅道の荒事、畜生道のヌヒグルミ、又餓鬼道は貧者の暮にも似たらんか、なほ劍の山の段あれば、炎王宮の御殿場あり、葬頭河の婆は安達が原を気どりしなるべく、血の池に入るは孕女と裏うへにて、死出の山下みつ瀬川の佛見えしは、ありやなしや西の河原の段などの、小ヅメは小僧にてやありけん。全て阿鼻・焦熱・狂蓮・無間などと、一幕毎に趣を変へ、鳴物を加へ、三線浄瑠璃のなきのみにて、雑劇に異ならねば、世俗呼びて地獄芝居とそ言ひしとぞ。さて戯子のうちに、一人の有髪もなく、皆頭を丸めて法師めきたる者ばかり、凡十人余り有りしといへる。されどその面をばあらはさず、かの能狂言の如く、又禰宜のする十二座廿五座などいふものゝ如く、地藏に扮する浮蔵王は能化の仮面に面をかくし、鬼形に扮する戯子坊主は鬼面に顔を包みしと言へり。さて、この地獄芝居起れるもとを尋ねるに、上下の毛の国に発起し、上下の総の国に至りて、いよいよ流行、田老村婆はこれが当に米銭をむなく散らし、野夫山妻は農事を怠り、且しみだりがはしき事のまぎれもありしとなん。されば、愈々盛大になりもてゆきて、その興行の村里は、臨時正月とも言ひはやしたりけん。さて村より里より駅と興行日を重ねて、安永の始め武蔵国足立郡千住の駅に来るに及びて、江戸に入らんの勢なり。ここに至りて、売僧の戯行、分にもれ聞へて、速やかに差し止められ、すべてこの事にかかはりたる者ども、それ〴〵の罪被りしとぞ。予いとけなき時祖母の物語に聞けり。(中略)予十才ばかりの頃かの地なる某寺の小僧より、大きやかなる仮面を貰ひたりしが、玩具箱の底に残りてありしを、総角する頃ふと見出して、これなんかの菩薩の仮面なるべしと始めて思ひあたりぬ」

右に見える「地獄芝居」は内容的には「鬼来迎」に共通し、そして、この芝居が上野・下野の国に発起し、上総・下総に至つていよいよ流行……と記すところ、これが「鬼来迎」と無縁だったとは思われぬ。上野・下野に発起の件につ

いては一度しらべてみたが、しかとした伝承を見いだすことが出来なかった。したがっていまのところは想像する以外にないのだが、記録や仮面から判断しても、地獄芝居が下総三寺の仮面劇の母胎になったとは思われぬ。したがって、下総にはすでに地獄芝居流行以前から菩薩来迎をラストに据えた、問答なども豊富な地獄変相の劇が行なわれており、そして、そうした宗教性に富んだ劇を通俗劇化する作業が、遊芸を得意とする僧体芸人によって行なわれて「地獄芝居」になり、さらにそのスペクタクルな演出が、歌舞伎のわざなどと一緒に「鬼来迎」などに里帰りの形で取り入れられるようになったかとも考えられる。

## 注

- (1) 田辺三郎助「建曆寺の菩薩面」(上総博物館報43号。昭和56年11月)
- (2) 右に同じ。
- (3) 片山正和著『鬼来迎』と房絵の面」(崙書房。昭和55年5月刊)
- (4) 「建曆寺縁起」(『君津町誌』後編(『君津町誌編集委員会編。昭和48年9月刊)所収。本文引用の文は大利根博物館長平野馨氏より直接送付頂いた原本よりのもの。
- (5) 平野馨氏の報告。
- (6) 『君津町誌』後篇所収。
- (7) 小寺融吉「地獄極楽の芝居」(『民俗芸術』4巻3号。昭和6年3月刊)所収、迎接寺発行のチラシ「鬼面の由来」にそのことを記す。
- (8) 昭和二十二年上演の台本、八百谷順応作「仏教劇鬼面判断脚本」(『迎接寺の鬼舞』所収下総町教育委員会。昭和56年9月刊)
- (9) 拙稿「鬼来迎考説」(『芸能史の民俗的研究』所収。東京堂出版。昭和51年7月刊)
- (10) 「鬼来迎」および広濟寺の縁起に関しては『廣西寺鬼堂略縁起』『虫生鬼堂縁起』『鬼来迎略縁起写』などの記録がある(いずれも深田隆明編『鬼来迎』(鬼来迎保存会。昭和54年7月刊)に翻刻収載)
- (11) 深田隆明編『鬼来迎』に台本所収。

## 三寺台本比較表

## 凡例

○本表は広濟寺・淨福寺・迎接寺三寺伝承の台本を小段ごとに区切りながら対照させたものである。  
 ○淨福寺・迎接寺は現在台本のみ残存しているので、記述はセリフ・ト書共に原文のままとし、広濟寺のみは現行の台本に添えて筆者が昭和37・38年度に調査した折りの演技記録をト書として記しておいた。  
 ○記載台本は次のものを底本とした。

## ①「鬼来迎」

拙稿「鬼来迎考説」(拙著『芸能史の民俗的研究』所収)所載のもの。

## ②「鬼来迎問答引接脚供養」

淨福寺所蔵『鬼来迎問答引接脚供養記』所載台本(正徳二年(一七一三)上演時のもの)。(拙稿「鬼来迎考説」所収)

## ③「五鬼判断法会」

香取文庫所蔵『冬父山三世院迎接寺五鬼判断並略縁起写』(安政五年(一八五八)写)所収台本。(下総町教育委員会編『迎接寺の鬼舞』所収。尾崎保博・石井保満・伊藤義雄氏翻刻)

次第	鬼来迎(広濟寺)	鬼来迎問答引接脚供養(淨福寺)	五鬼判断法会(迎接寺)
前儀	○亡者(面ヲツケル)三人舞台ニ出、四方ニ塩ヲ撒ク。		○酒水 香衣老僧 伴僧二人 ○方丈 僧一人 香衣二人 楽人六人、但シ皆々本堂之人 御申念アリ
顔見せ	(大序) 正面中央奥ニ浄玻璃ノ鏡ノ作りモノ。ソノ左右ニ床机一ツズツ置ク	○一番 閻魔王 装束赤地金襴直衣大口着石之手ニ笏左手ニ笏持出	
		二番 悪俱生神	



三番  
装束青地直衣ク、リ袴左ノ手  
ニ鉄札右手筆持出  
善俱生神

四番  
装束赤地直衣ク、リ袴左ノ手  
ニ金札右ノ手筆持出  
奪衣婆

五番  
装束赤地大帷子下着白小袖団  
扇持出ル  
懸衣翁

六番  
装束青地水衣大口金扇ヲ持出  
ル  
奪精鬼

七番  
鬼形之装束ニテ大鉞持出ル右  
坐ス  
奪魂鬼

八番  
鬼形之装束ニテ大手鉞持出ル  
左坐ス  
阿防羅利

九番  
鬼形之装束ニテ大鉄棒持躍出  
ル長サ九尺  
伝死鬼

拾番  
鬼形之装束ニテ右大鉞左鉄ノ  
繩持出ル  
牛頭鬼

拾一番  
鬼形之装束ニテ大長刀持出ル  
馬頭鬼

---

## 拾二番 罪人

下着白小袖上衣白布金剛杖持

出ル長サ二尺五寸

鬼形之裝束ニテ大鉄棒持出ル

長サ七尺

○右閻王ヨリ次第ニ舞台ニ着座シ冥官

等大王ニ恭敬尊重之躰可成。

○サテ大王并冥衆等衆生善惡勸帳ヲ見

ル事暫シテ大太鼓ヲウチ、冥界震動

之躰ヲ成也。

○十王、簾ヲ挙ル。

○二童児、両方ヨリ出テ、入口テ記録

シ床机ニ着ス

閻魔大王

「冥途、黄泉八丈地獄ノ主、閻魔大王

トハ我衰也、相次テ九体ノ小王ア

リ、相寄テ一切ノ衆生ノ善惡ヲ定

メ、抑此ノ十王ニ多ノ眷屬アリ、地

行夜叉、飛行夜叉、善童子、惡童子

アリ。」

善童子

「司命、司録、五道ノ冥官、此等ノ面

々、此等ノ面々、此皇宮ニ相寄ル、

三千大千世界ノ善惡ヲ記シ、善人ハ

極楽ヘ送り、一切ノ善根ヲ記ガ故ニ

善童子トハ吾衰也。」

惡童子

「然ル地獄ノ員ハ、一百三十六地獄、

罪人來ル則ハ、其罪ノ輕量ニ因テ地

獄ニ墮ス、一切ノ惡業ヲ記スガ故ニ惡

童子トハ、吾衰也。」

○閻魔大王、下手ヨリ登場。仮面・冠  
ヲツケ、右手ニ筆、左手ニ笏ヲ持チ、  
両手ヲ腰ニ、足ヲ大キク上ゲ下ロシ  
シナガラ舞台ノ四方ヲ踏ミ（四方切  
リトイウ）、ヤガテ浄玻璃ノ鏡ノ横、  
上手寄リノ床机ニ腰ヲ下ロス。

○俱生神、下手ヨリ登場。仮面ニ冠、  
右手ニ筆、左手ニ笏ヲ持ツ。四方切  
リハ大王ノ動作ト同ジナガラ、ソノ  
間、筆デ笏ニ字ヲ書クシテサガ入  
ル。ヤガテ、大王ノ、向ッテ左隣リ  
ノ床机ニ腰ヲ下ロス。

○奪衣婆、下手ヨリ登場。面ヲツケ、  
髪ヲフリ乱シ、左手ニ竹杖、右手ニ  
浣田扇ヲ持チ、腰ヲカガメテ出、一  
度、下手ノ方ヲキツ見込ミ、次イ  
デ大王ノ前ニスワリ、左手首ニカケ  
タ数珠ヲ取り、大王ニウヤウヤシク  
礼ヲシ、ヤオラ、米ヲ左右ニ撒キ、  
立テ上ガッテ舞台ヲヒトメグリシ、  
大王ノ右隣リニ直ル。

死出の道  
行

○女ノ亡者、下手ヨリ登場。ひため直ひため面ニ三角ノ白布ヲ頭ニマキ、赤ノ着物ニ白衣ヲカズキ、杖ヲツキナガラ出ル。

○太鼓打ヲハリテ楽屋幕ノ内ニテ笛ヲ吹ク調子トモニ罪人出ル。罪人舞台ニ出テ四方ヲ顧テ且ク忘然タル風鉢ヲナス。罪人歩ミナガラ迷土之苦ナル事ヲ口説ク也。

罪人

「(哀ナル声ヲ出シ惣身ヲ震カシ) 嗚呼悲哉独リ黄泉之旅路ニ迷ヒ從レ冥ニ入レ冥ニ從レ苦人レ苦悲ヤナ」

鬼の呵責

○第一之呵責 獄率罪人ヲ見テツル  
ト走りヨリ鉄棒ヲ以テ大地ヲ打テ呵責ス

獄率

「業因罪業ノ醜ヒニ答テ阿鼻奈落之底ニ可墮者也汝可レ聞我等獄率自レ天非レ降ル自レ地非レ生ル頭ニ汝カ悪業我等ヲ也(ト牛頭馬頭阿防羅刹罪人之手足或ハ髪ヲ觸テ可責利那モ無際攻ル躰ヲ可レ成)」

罪人

「(如何ニモ哀ナル声ヲ出シテ答可申

幽霊

「吾ハ是、南閻浮提ナル大王ノ后ナリシガ、生者必滅ハ穢土ノ理、逃難無常ノ風ニ誘ハレテ黄泉イミ之旅路ニ趣也。娑婆世界ニアリシ時ハ、百官万人ニカシヅカレン身ナレ庄共、今ハイズレノ供スル番女モナク、但、スゴト我独、耳ニ聞ユル者ハ三惡非迷ノ声バカリ、先達者ハ涙也。誠ニ貯ヘ置ク財宝モ、皆是四隣ノ宝ト成、今更頼ムハ善根ナレ庄共、一旦ノ榮花ニ驕リ少ノ善モナサザレバ、返スルモ身ノ恨也。

黒鬼

「ヤア、汝、人生受業ノ縁尽テ、今是死門ニ趣ナリ。汝カナセル生涯ノ善惡ヲ覚知スルヤ否ヤ。」

幽霊

「善惡トテ、覚知ナシ、此先ハ如何ナル処ヘ参リ、イカナル罪ノ呵責ニ逢候ハンヤ。」

黒鬼

「汝知ラズカナ、此先ハ十王次第ノ判断ニ、閻魔王ノ御前ニテ、罪ヲ究メ、善人ハ極楽ニ送り、悪人ハ地獄

ナリ)此レハ如何ナル事ソ、心ニ罪  
ノ無シ覺候、今度計ハ免シ御座。」

○第二之可責

獄率

「(重テ鉄棒ヲ以テ大地ヲ打テ問責シ  
テ)妄心是第一之怨也。此怨能ク人  
ヲ縛テ送ニ地獄ニ我等カ非レ送ルニ汝レ可  
聞非ニ他人ノ因レ惡ニ他人ノ為ニ受  
苦報ヲ自ノ惡業ヲ以テ自得ル果也。

汝有テ婆婆ニ渡世ニ繫シ遲々タル春ノ  
日モ空ク暮シ事業ニ耽テ惡業ヲ思ヒ  
九夏ノ溼日ニモ拭レ汗ヲ求ニ利養ヲ颯々  
タル秋ノ夜モ徒ニ明シ、心ハ走リ千里  
之風ニ取リテ山野ノ獸ヲ年ヲ経ント思  
ヒ、身ハ浮詔万里ノ波ニ取リ江河ノ鱗ヲ  
月ヲ重シト計ル。女冬ノ寒キ朝ニハ  
凌レ冰渡ニ世路ニ皆是愛妻愛子ノタメ  
ニシテ被レ繫ニ諸徒眷屬ニ恩愛ノ繩無ク  
断リ。不愛異相ノ輩ヲ見テハ瞋恚ノ  
焰無シ止事ニ念々作々は墮獄受苦ノ因  
纒モ不ニ白業ニ容ニ身三口四意三之黒  
業ヲ犯ス。悉ク是三塗ハ難ノ業汝カ  
好死出之山登レ々」

罪人

○ト呵責シテ鉄棒ヲ以テ地ヲ究キ右ノ  
足ニテ大地ヲ踏ミナラスヘシ。

ニ口出ス、夫レ地獄ト謂ハ、等活、

黒繩、衆合、呼喚、大呼喚、炎熱、  
極熱、無間地獄ヲ底トシテ、一百三  
十六地獄、其罪ノ輕量ニ依テ、其地  
獄ニ墮ス、扱又、此山ハ死天山ト云  
テ、四天山ノ随一ナリ、四天山トハ  
生老死苦トテ、四体日々ニ衰へ、是  
皆、修因感果ノ業山也。中ニモ此山  
ハ兩徑相逼テ、膝ヲ破、膚ヲ裂、骨  
ヲ折キ、髓ヲトロカシ、死天死ヲ重  
ネル哀、流転生死千生万死也、其死  
骸天ニ重ル、故ニ死天山ト号ク。然  
ハ汝、感業積リ積テ口口山ヲ今此山  
ノ苦ハ、八丈地獄ノ苦ミニ対スレバ、  
九牛ガ一毛ノ如シ。諸々地獄ノ苦  
ヲ、大海ノ水ニ此スレバ、命責ル処  
ノ鉄杖ハ、其一滴ニモ及バズ、自業  
自得果、衆生如レ是聞逆、己カ罪、  
己ヲ責ム、サア是山口登レ〜。」

幽霊

「嗚呼 悲シイカナア 嗚呼悲シイカ  
ナア 今此山ノ苦ハ、山高ク嶮岨ニ  
シテ、岩モ樹ノ根モ、皆鋭口ヲベ  
シ、節ヲ切、嗚呼答ガタキ苦ミナ  
リ。実ニ皇極天皇善口ニ逢ヘタマヒ  
テ へワクラワニ、問フ人アラバ、

「(刀山) 劔樹登ル 躰ヲ可成) 嗚呼恐シヤ 苦ルシヤ、手ニ取ル草木ハ劔ト成リ地ニ踏ム砂ハ刃トナル。前ニハ岩石ソビエ後ニハ獄率嗔ル。嗚呼悲シヤ 苦シヤ 身ニ添者トテハ影計リ適々聞者トテハ阿防羅利ノ阿責ノ声平ニ今度計リハ許シ給ハレ」

○第三之阿責  
獄率

「汝於娑婆ニ不<sub>レ</sub>見ニ無常ヲ不<sub>レ</sub>聞閻浮不定ノ境ニテ朝ニ開ク榮花ハ暮ノ嵐ニ散リタヘニ結実ハ明ケ之日ニハ消ス。誠ニ夢幻ノ世ニ有テ其<sub>レ</sub>衰業ヲ乍<sub>ニ</sub>見聞<sub>ニ</sub>常恒ニ榮<sub>ニ</sub>事ヲ案シ不退ニ娑婆ニ在<sub>ニ</sub>ト思ヒ他ノ修善ヲ見聞テハ致<sub>ニ</sub>嫉妬ノ誘<sub>ニ</sub>己カ身ノ過ヲ説テ強ニ嗔リヲ成シ今更<sub>ニ</sub>迷<sub>ニ</sub>冥途ノ路<sub>ニ</sub>更<sub>ニ</sub>己カ所作ノ業因也。汝カ好ム三途河渡<sub>レ</sub>々々」

罪人

「(三途河渡ル 躰ヲ可成) 嗚呼恐シヤ 悲シヤ 山水ノ瀬ヲ渡ントスレハ煩惱ノ水早ク漲リ落ル 衰如<sub>レ</sub>矢ノ江深ノ淵ヲ渡ントスレバ業障流<sub>レ</sub>高ク底ヲ見<sub>レ</sub>ハ毒蛇舌ヲ卷テ更ニ心モ難<sub>レ</sub>堪。有橋ヲ渡ントスルニ愛江之瀬トテ橋細ク弱キ事糸筋ヲ如<sub>レ</sub>踏。前ニ進ントスレハ涙ニ噓<sub>ニ</sub>テ路不<sub>レ</sub>見。跡工

死出ノ山、ナクノ口ニクトオモヘバト。カコチ賜ヘルモ、此処ナラン返スノスモ恨メシキハ我身ノ罪、何トシテ、此山ノ苦ヲ 吾元住ミシ人界ヘ知ラセタヤナア」

青鬼

「汝 不<sub>レ</sub>知ヤ 此処ニ三途ノ大河アリ、子細ヲ語リ聞スベシ 貪嗔強<sub>ニ</sub>ガ故ニ水火ノ如シ 善心寡<sub>ニ</sub>キガ故ニ口道ノ如ク 善心ノ人ニハ橋ト見エ 悪心ノ人ニハ口火ノ如シ、然共其川ノ広サ縮横四十由旬 罪ノ輕重ニ寄<sub>ニ</sub>ガ故ニ、皆度彼岸トイヘリ、此河ノ辺ニ娑婆アリ、是エ来<sub>レ</sub>、娑婆世界ヨリ大罪人来リ候。」

奪衣婆

○奪衣婆、亡者ヲ見付ケ、庖丁ヲカザシテ迫リ、襟首ヲツカンデ俱生神ノ前ニヒキ据エル。

飯ントスレハ悪鬼鉄棒ヲ以テ打ツ夏如ニ雨ノ降<sup>カ</sup>風ニ如シ砂ヲ飛<sup>ガ</sup>嗚呼憂ヤ苦シヤ今度計ハ計シ御座セ」

○第四之呵責

獄率罪人ニ鉄ノ繩ヲ掛シタタカニイマシメ姫ノ処ニ引キ行

○此時牛頭馬頭罪人ヲ引立テ姫ノ前ニ引スエル

獄率

「三塗河ノ姫御前ニ可申旨アリ。南閩浮洲大日本国ニテ十惡五逆ヲ飽造テ造ル大罪人ヲ搦取テ来候ソ任ニ龜例ニ早ク剥ニ衣装ヲ可レ被<sup>レ</sup>取<sup>ル</sup>候」

姫

「好々業因極タル大罪人トヤ、三塗河ノ姫トハ吾カ夏ナリ。此木ハ衣領樹ト云。疾々其衣装ヲ脱テ此木ノ枝ニ可レ掛<sup>レ</sup>エイ罪人」

罪人

「此ノ衣装ヲ脱テハ姿顯<sup>レ</sup>寒苦肌ヲ攻ムヘシ。御慈悲ニ此レヲハ許シ御座セ」

姫

「何々ト云ソ、汝カ衣装ヲ脱スル夏ハ拙キ骸ヲ顯ニセンガ為也。敢テ此道

三途河姥

「此罪人 三途川ノ姥トハ我<sup>(事)</sup>夏也、所詮吾等ガ役トシテ冥途ニ来ル罪人ハ、一人モ不<sup>レ</sup>残肌ニマトヘシ物ハ、衣<sup>(事)</sup>口報ト言、神出現シ大日如来ノ宝衣ヲ働テ、汝ニ与シニ、品其々家ニ<sup>ツケテ</sup>在 貧者ニ一衣モ不<sup>レ</sup>施是故ニ我亦汝ヲ剥トリ、赤裸ニスル也。仰我住ム後エニ毘蘭樹ト云大木アリ、此樹ニ花咲時ハ口大サ車輪ノ如シ、色ハ口口金色ナリ、罪人来ル時ハ此花忽<sup>レ</sup>凋ミ枝葉忽<sup>レ</sup>然ト枯果テル。善人来ル時ハ凋<sup>レ</sup>ミシ花モ亦開キ素ノ如盛ノ色ヲナス口サレバ一切衆生ノ独中ニハ葉蓮花有テ善心発<sup>ル</sup>則<sup>レ</sup>ハ、心蓮忽開キ悪心起ス則<sup>レ</sup>ハ、心蓮凋ム口汝大罪人ト見ヘテ 此花凋ナリ、早々上衣ヲ脱テ、渡セ」

幽霊

「アア笑止ナリ 如何成罪アレバ<sup>連</sup>此衣裳ヲ剥取ラレテハ身体顯ハニシテ恥カシ 赦シタマヒ」

<p>裁 判</p>	<p>大王 「俱生神、鉄札ノ表、ヨウク改メ見ヨ」 ○俱生神、浄玻璃ノ鏡ヲ取ツテ罪人ノ顔ヲウスシテ見ル。 俱生神 「鉄札ノ面、浄玻璃ノ鏡ニカケ、改メ見候トコロ、娑婆國中ノ大悪人ナ</p>
<p>○懸衣翁 此時繫衣翁ツ、ト出テ罪人ノ上衣ヲ剥ク 懸不翁 「汝ノ身三之縦口四意三ノ横ヲ以テ織リ立テ造悪ノ釘煩惱ノ繩ノ糸ニ綴リタル衣装ヲ剥キ取テ極悪ノ肌ヲ顯サン」 ○ト云テ罪人ノ上衣ヲ剥テ衣領樹ニ掛ケ置ク也 ○懸衣翁本ノ座ニ可レ直ナリ</p>	<p>ハ善人之来ル非レ処、汝チコトキノ悪人ノ来ル処ナリ。汝在ニ娑婆ニ貪欲強成而ノミニテ一善ヲモ不レ修今獄率ノ手ニ渡テ後悔スルトモ有ニ何ノ益カ。為ニ業火ニ身ヲ焼レンナ骨髓尚ヲ可レ残ルヤ早々剥取衣装、彼木枝ニ可レ掛ヤイ」 ○獄率等罪人ヲ鉄繩ニテイマシメ閻王ノ宝前ニ引スル 獄率 「閻魔大王之御宝前ニ謹而奏聞。造悪不善ノ大罪人カラメ取テ伺公仕リ候。俱生神ノ籌ヲ勘ニ業秤ニハカリ業鏡ニ令レ向、重々ノ呵責ヲ加増仕ラント存シ候」</p>
<p>幽靈 「我ハ如何ナルゴザヤ身ニハ邪見ノ口ヲ口テ解脱如何ナル年月ゴザ」</p>	<p>白鬼 「娑婆ヨリ大罪人来リ候 早々参レ」 閻魔大皇 「汝 前生ニ冥途ノ業尽キ人間界ニ歸ル時、仏道修行ヲ専ニ生死ノ家ヲ離レ、莊嚴微妙ノ浄土ニ往生スヘシト慰慰ニ教ヘシニ 復此庭ニ来シナ、受ケ</p>

リ。ヤアヤア獄率ドモ。コノ罪人、シバラク獄舎へ押し込メテオケ。追ッテ沙汰ニ及ブモノナリ」

○ソノ声ニ応ジテ、黒鬼ト赤鬼、亡者ニトビカカツテ、コレヲ下手ニ連レ去ル。

○大王之音声如何ニモ雷ノ鳴ル如クナル大音声ニテ罪人ニ可レ問

大玉

「汝ハ抑モ何ノ国如何ナル者ソ、何タル善根ヲ成シタリケン明ニ申セ」

罪人

「我ハ大日本国ノ者ニテ候。耻敷キ衰ニ候エトモ身貧家ニ受生ス。故ニ一善モ不レ修又聞法結縁ノ庭ニモ不レ出。乍レ去<sup>レ</sup>造リシ咎ハ覚サムラワス」

大王

「汝何トモチンセヨ。夫レ々淨願梨鏡ニ引向ケ所作ノ惡業ヲ明ニ見セ業秤ニハカリテ罪ノ輕重ヲ可レ計、又善俱生神惡俱生ノ札ノ面テヲ可レ聞。先惡俱生神ノ鉄札ノ面テハ如何」

○此時惡俱生神鉄札ヲ捧ケ閻王ノ前ニ出ル

惡俱生神

「鉄札ヲ読テ」鉄札之面重罪之者ナル寔明白ナリ。一ニハ父ヲ殺シ二ニハ母ヲ害シ三ニハ羅漢僧ヲ殺シ四ニハ和合僧衆ヲ破リ五ニハ仏ノ身ヨリ血ヲ出シ惣而惱慢嫉妬我慢偏執等念々作々皆以テ三途ハ難ノ業定定ノ罪人

難キ人身ヲ受ケ難レ逢仏法流布ノ国

ニ生レ仏道修行ヲ外ニ成シ、愆ニ

惡業ヲ作シテ 誠ニ宝ノ山ニ入テ口

手ヲ宜クストハ汝カ衰也、汝娑婆ニ

在シ時□□万宝不足ナク、富貴ノ家

ニ乍レ在、無縁ノ者ヲバ、憚ノ吾幸福ヲ

□ヒ、サア娑婆ノ妻子親族カ今ノ苦

ミニ替ナラ、又ハ大勢ノ眷属ヲ、一

人モ供奉スカナ、汝克聞ケ□人界ニ

在シ時<sup>三</sup>使ヲ遣ハセシニ来ラズ、

此使ニ逢ルヤ否ヤ、先第一ノ使<sup>戸カ</sup>二年

老テ頭白髮シ□或ハ齒零<sup>コソク</sup>身体日々衰

ヘ杖ニ掛、呻吟ス、又第二<sup>戸カ</sup>ノ使、老

苦共病ニ苦メリ、第三<sup>戸カ</sup>ノ使ニハ、死

若転倒シテ相果ル、是則天ノ三使也、

汝カ身ハ三品ノ煩惱ヲ、皆鉄札ニ明

白也乍レ去少善成<sup>共</sup>□我身ニ覺有ナ

ラバ、一粒ノ倍ノ切穂ニ応スベシキ、

善モ有ヤ無ヤ。」

幽霊

「自ラ娑婆ニ在シ時、觀世音エ詣シ事ノ候」

閻魔大王

「然バ罪人ノ申ニ任セ口善童子金札ヲ



ト見エテ走」

大王

「善俱生神ノ札ノ面テハ如何」

○善俱生神金机ヲ捧ケ大王ノ前ニ出テ  
札ヲ可シ読

善俱神

「(金札ヲ読テ) 三有五々ノ簿ノ面テ  
ヲ見ルニ善人タル痕跡ヲ削テ露計モ  
修善不レ見ニ何ソ拙キ業因ヲ諍事有ラ  
ン哉」

○ト云テ罪人ノ方ヲ暫ク見ルナリ。

大王

「如何ニ獄率等此ノ罪人ニ淨頗梨鏡ヲ  
見セヨ」

○此ノ時獄率罪人ノ策<sup>レ</sup>髮ヲ淨頗梨鏡  
ニ引向テ呵責スル

獄率

「業鏡之面テ明カナリ。娑婆ノ鏡ハ姿  
タヲ見スル今此業鏡ハ姿ト心ト一ニ  
見スルソ。汝娑婆ニ有シ時ノ罪惡ヲ  
能ク見ヨ々々々」

○ト云テ頭ヲ突テ呵責スルナリ。

罪人

「嗚呼ウナメシヤ悲シヤ密ニ成セシ罪  
咎モ今此鏡明ニシテ無<sup>レ</sup>隱。カクア  
ルヘシト知ルナラバ何ニシニ罪ヲ造

改ヨ。」

善童子

「如何ニモ觀世音エ詣シ度モ候ヘ共、  
是ハ夫ヲ祈ル祈願ニテ、大慈大悲ノ  
利益ヲ受、大王ノ后ト成候也。

閻魔大皇

「然ラバ惡童子 鉄札ヲ改ヨ。」

惡童子

「大慈大悲ノ利益有テ 帝王ノ后ト成  
是ハ逆縁ノ祈ニテ今惡業ノ役ニ是立  
リ申候。」

閻魔大皇

「ヨリヤ罪人 能聞ヤ 汝 色欲迷境  
ノ祈願、一目大悲大慈ノ御利益ニヨ  
リ、帝王ノ后ト成ハ猶造罪ノ縁至  
テ、重々論ハロシ、提婆達多ハ六万  
藏経毎日雖ニ誦誦 名聞利養ノ故ニ  
シテ、地獄ニ口出スカ吏願然タリ、  
獄率共、其罪人ヲ善道ノ秤ニ掛テ罪  
ノ輕重ヲ糺スベシ。」

白鬼

「業道経曰 業道ハ如シ秤 重キ物ハ  
必索ト云テ、斤ハ必重キ方ニ傾ム  
ク」

幽霊

「一切衆生悉有仏性ト聞時ハ、地獄エ

ルヘシ」

○ト云ナカラ右ノ手ニテ淨頗梨鏡之面ヲ摺リナヅル牀ヲ可レ為。

獄率

「イデノ汝ノ業秤ニ計テ罪ノ重ヲ知セン」

○ト云テ罪人ヲ秤ノ四ニ投入ル、重リノ磐石輕ク挙ル。

○業秤ハ熱鉄重リハ磐石ヲ作ルヘシ獄率

「業道如秤重者先牽ナリ。汝カ造惡思ヒ知レタ々」

○ト云テ、鉄棒ニテ大地ヲ三度可レ打。罪人

「サバカリノ磐石モ輕クアガリシ我カ罪ヤ思エハ々口惜シヤ」

○ト云テ涙ニ噓ブ牀ヲ可レ為。獄率

「訴エ申上ン例ノ菩薩来リ玉ヒテ乞請ケ赦ント候トモ会テ其儀有間敷候。

惡業深重ノ大罪人早々無間大地獄ニ落シ入レ娑婆ノ榮花ヲ思ヒ知ラセ

ン。」

獄率  
「奪精鬼奪魂鬼ニ向テ）例ノ菩薩ニ被レ奪レ給フナ」

ハ参リカタシ」

閻魔大皇

「是汝カ知処ニアラス。悉有仏性トハ理仏性約ス。汝ニオキテ作業ノ縁ナシ、其上、女人成仏ノ經文、我未ダ

不レ聞。涅槃大經ノ明文ニ所レ顯〇三千界男子諸煩惱合集ハ、為一人女

人之業障ト、説賜ヘリ或女人同墮必墮ニ無間ト云テ 女人ヲ撰也 其

上ニモ五障ニ從超ニ男子、高貴ニ乍レ在、党塔伽藍ハ建立セズ 和僧

ニ供養セズ 第一疾嫉妬ノ罪〇〇〇〇〇

〇ベカラズ、故ニ宝積經曰、外面ハ菩薩ニ似テ内心ハ夜又ノ如ト説タマヘ

リ 先其罪人ヲ等活地獄ヘ送ベシ。」

幽靈

「如何ニ罪業深ク臣女人仏法藏ト聞時ハ、何ソ成仏ノ縁ナカラヘ候〇若女人ナカリセバ諸仏ノ出世モアルベカ

ラズ、其上ニ、転輪靈王ノ御后ハ妙夫人ト申セシハ、阿弥陀如来ヲ御子

持テ、成仏アリシト聞待ル。」

閻魔大皇  
「愚也ノ先瓔珞經ノ五百女ハ上根上智ノ女人也。法花經ノ竜女成仏ハ權者ノ為セル処也、業師十二ノ本願

<p>賽ノ河原</p>	<p>(賽ノ河原) ○櫓ノウシロカラ忍ビヤカニ和讃ノ声 ト鉦ノ音 〜婦命頂礼、地藏尊</p>	<p>○ト云テ罪人ヲ引立テ無間地獄ニ追立 テ行 ○此ノ時ヲビタノシク鳴動ノ躰ヲスル 楽屋ノ内ニテ大太鼓ヲ打ベシ</p>	<p>ハ、是持戒ノ女人也 阿弥陀如来ノ 本願ハ念仏ノ作業ニアリ、汝 上根 上智カナ 戒律戒行ヲ護持セシカ、 初七日ヨリ、判断ニ頼リ娑鬼、獄率 ノ呵責ニ逢 今此処ニ来テ罪ヲ備フ 大罪人、獄卒共、淨頗梨ノ鏡ニ見セ ヨ。」 青鬼 「大皇ノ側ニ淨頗梨鏡アリ、経曰 色 心好了淨頗梨鏡トイヘリ、汝 娑婆 ニテ白皮ヲ装ヘ色彩鏡ハ色ハ写スト 云庄心ハ写カ、マズ今此鏡ハ色心共 ニ顯タリ、サア、己 鏡ヲ見ヨ。」 善童子 「先ノ此罪人ハ、親屬モ多ケレバ □ ヲ運テ吊フ支シテ在事ニ候也。」 閻魔大皇 「ゲニ尤モ 然ラハ 獄卒共 其罪人ヲ 五七日迄、黒闇天女幢エ押込テ置 ケ。」 獄卒共一同 「イサ〜 罪人 立マセイ〜」</p>
-------------	--	---	--

コレハコノ世ト事変リ  
賽ノ河原ノ初旅ニ……

○コノ声ニ送ラレテ、竹杖ヲツイタ亡  
者ヲ先頭ニ、ソノウシロニ子供ノ亡  
者タチガツナガツテ、死出ノ山ノ前  
カラ舞台ヘ出ル。

亡者ハイヅレモ白衣ニ白ノ手甲、脚  
絆、頭ニ白ノ三角頭巾ヲマク。

○一同、舞台ノ中央ニ輪ニナリ、腰ヲ  
カガメテ小石ヲ拾イ、積ムシダサヲ  
スル。

一ツヤ二ツ三ツヤ四ツ

十ヨリ下ノ幼児ガ

小石ヲ集メン

一重積ンデハ父ノタメ

二重積ンデハ母ノタメ

三重積ミニシンノ石ハ

兄弟眷族ワガタメト

日モハヤ山端ニ隠ルレバ

呵責ノ鬼ガアラワルル

○上手カラ黒鬼、下手カラ赤鬼ガ奇声  
ヲ発シナガラオドリ出、亡者タチヲ  
捕エヨウトスル。

黒鬼

「幼児タチ、ヨク聞ケヨ」

赤鬼

「汝等父母娑婆ニアリ」

黒鬼

「朝タダ、ムゴイヤ可愛イヤイトシイ  
ト思ウバカリニテ」

赤鬼

「追善供養ノ心ハナシ」

黒鬼

「皆、汝等ノ罪トナル」

赤鬼

「ワレヲ恨ムコトナカレ」

○亡者タチ、逃ゲマドイ、鬼ソレヲ追  
ウ。

○死出ノ山ノ前ヨリ、地藏登場。菩薩  
面ヲツケ、右手ニ柶ノ枝ト錫杖ヲ持

ツ。亡者タチ、地藏ノ背ニ隠レル。

○地藏、鬼ヲ打チ払イ、ヤガテ黒鬼、

赤鬼、次々ニ下手へ退散スル。

○地藏、子供ノヒトリヲ抱キアゲ、ウ

シロニ他ノ亡者タチヲ從エテ舞台ヲ

ヒトメグリシ、シズカニ退場スル。

ソノ間、和讃ノ声ヒビク――

南無阿弥陀仏、阿弥陀仏

裳裾ヲ給エヨ地藏尊

ナムアミダブツ アミダブツ

ナムアミダブツ アミダブツ

## 釜入レ

(釜入レ)

- 舞台中央ニ釜ノツクリモノ。正面奥ニ閻魔大王ト俱生神、上手ニ黒鬼、釜ノ前ニ奪衣婆ソレゾレイル。
- 奪衣婆、団扇デ釜ヲアオグ。
- 赤鬼棒ヲ持チ、下手カラ亡者ヲ追イナガラ出テクル。
- 奪衣婆、亡者ヲ捉エ、釜ニ投ゲ入ル。
- 黒鬼、薪ヲ放リ込ムシグサ。マタ赤鬼トモドモ亡者ヲ押エツケル。
- 赤鬼、棒デ釜ノ中ヲカキマワス、赤鬼
- 「黒公、ユダツタロウカ」
- 黒鬼
- 「マダマダ」
- 黒鬼マタ薪ヲ投ゲ込ムシグサ。赤鬼、棒デ亡者ヲ押エ、釜ヲカキマワス。
- 赤鬼
- 「エエ、黒公、ユダツタゾ」
- 赤鬼、黒鬼
- 「首デモ切ツテ、喰ラオウカ」
- 二鬼、亡者ヲ引キアゲ、最後ニ棒デ吊シ上ゲル。

## 死出ノ山

(死出ノ山)

- 奪衣婆ヒトリ、舞台ニイル。
- ヒトリノ亡者、赤鬼ニ追イタテラレナガラ、枝ヲツイテマロビ出ル。
- 奪衣婆、上手ノ堂ノ陰カラ、腕ト箸ヲノセタ盆ヲ持ツテキテ、亡者ニ無理ヤリ箸ヲ取ラセヨウトスル。
- 亡者、タベヨウトシタトタン、腕ノ中カラ火ガトビ出ル。赤鬼、哮ビリアゲル。
- 奪衣婆、庖丁ヲカザシテ亡者ニ迫ル。
- 奪衣婆  
「ヨシヨシ、死出ノ山ノ呵責致ソウカ」
- 奪衣婆、亡者ヲツカンデ、死出ノ山ヘ追イアゲ、赤鬼モマタソレニ加ワル。
- 奪衣婆、下手ヘ退場。
- 亡者、梯子ヲ伝ワツテ山ニノボルト、上カラ突然、黒鬼ガ姿ヲアラワス。
- 亡者、驚イテ梯子ヲスベリ、中ホドデ逆サニ倒レル。
- 亡者、フタタビ山ニノボルト、黒鬼、作りモノノ大石ヲ持チ上ゲ、亡

<p>者ヲ押エツケル。亡者、口カラ血ノリヲ流ス。</p> <p>○黒鬼、亡者ヲ下へ突き落ス。</p> <p>○落トサレタ亡者、フタタビ赤鬼ト黒鬼ニ責メラレ、トド踏ミツケラレル。</p>	<p>大王</p> <p>〔笏ニテ高く一打大音声ニテ〕阿羅々々々不思議ヤナ獄中震動シ虚空ニ珍妙華雨リ異香四方ニ薫シテ音楽聞近ク聞ユ。定テ菩薩ノ来臨ニモアルラシ(楽屋ニテ暫シ音楽ヲ奏スヘシ)</p> <p>○菩薩慈悲ノ御相好ヲ現シテ獄中ニ来臨有テ獄率罪人ヲ追立テ無間ニ投ケ入ルルヲ見テ</p> <p>觀世音菩薩</p> <p>〔蓮花ヲ持玉フ〕止ミナンタ々如何ニ獄率等此罪人ハ何ノ依テ業ニ如何ナル地獄ニカ遣ス罪人ソヤ</p> <p>鬼</p> <p>〔此罪人ハ十惡五逆ヲ飽マデ造ル大罪人ニテ、諸王科罪ヲ勒エ被レ落ニ無間大地獄ニ候〕</p> <p>菩薩</p> <p>〔汝等且ク願フ止テ我說ヲ可レ聞。我娑婆ニシテ発心修行シ今西方淨上之能化ノ補処タリ。然ルニ我昔シ志ス</p>	<p>○本堂ニ大音楽ヲ奏ス。</p> <p>閻魔大皇</p> <p>〔遙カ遠ク、南閻浮提ニ□テ大法事ノ聞ユルハ、何等ノ為ノ修行ソヤ善童子金札ヲ改メヨ。〕</p> <p>善童子</p> <p>〔彼ハ、三十五日以前、黒闇天女幢ニ押込置シ罪人ノ為メニ、娑婆ノ親族相集テ、貴僧ヲ供糧シ、追善作福仕候。〕</p> <p>閻魔大皇</p> <p>〔獄率共、三十五日以前、黒闇天女幢エ押込シ罪人ヲ早々取連来レ。〕</p> <p>閻魔大皇</p> <p>〔此是ノ為ニ罪人ニ、娑婆ノ親族、貴僧ヲ供糧シ追善作福スト謂リ、惡童子鉄札ヲ改メヨ。〕</p> <p>惡童子</p> <p>〔追善作福スルト雖モ、罪人ノ為ニハ成不レ申、還テ仇トナリ候、其故ハ他人ノ口ヲ防ガン為、名聞利養ノ法</p>
<p>觀音出現</p> <p>○觀音菩薩、下手カラ登場。地藏ト同ジ菩薩面ヲツケ、南天ノ枝ヲ手ニ持チ、赤、黒ノ鬼ト相對ス。</p> <p>觀音</p> <p>〔鬼王、コノ罪人ヲ許セ、離セ〕</p> <p>黒鬼</p> <p>〔ソモソモ、コノ罪人トイウハ〕</p> <p>赤鬼</p> <p>〔娑婆國中ノ大惡人ナリ〕</p> <p>觀音</p> <p>〔ソノイワレイカン〕</p> <p>黒鬼</p> <p>〔堂塔仏閣ニ一度ノ參詣モナク〕</p> <p>赤鬼</p> <p>〔一紙半錢ノホドコシモナク〕</p> <p>黒鬼</p> <p>〔昼ハ世路ノ暇ヲ惜シミ〕</p> <p>赤鬼</p> <p>〔夜ハ淫悩ノ襖ヲ重ネ〕</p> <p>黒鬼</p> <p>〔ムナシク財色滋味ヲムサボルバカリ</p>	<p>大王</p> <p>〔笏ニテ高く一打大音声ニテ〕阿羅々々々不思議ヤナ獄中震動シ虚空ニ珍妙華雨リ異香四方ニ薫シテ音楽聞近ク聞ユ。定テ菩薩ノ来臨ニモアルラシ(楽屋ニテ暫シ音楽ヲ奏スヘシ)</p> <p>○菩薩慈悲ノ御相好ヲ現シテ獄中ニ来臨有テ獄率罪人ヲ追立テ無間ニ投ケ入ルルヲ見テ</p> <p>觀世音菩薩</p> <p>〔蓮花ヲ持玉フ〕止ミナンタ々如何ニ獄率等此罪人ハ何ノ依テ業ニ如何ナル地獄ニカ遣ス罪人ソヤ</p> <p>鬼</p> <p>〔此罪人ハ十惡五逆ヲ飽マデ造ル大罪人ニテ、諸王科罪ヲ勒エ被レ落ニ無間大地獄ニ候〕</p> <p>菩薩</p> <p>〔汝等且ク願フ止テ我說ヲ可レ聞。我娑婆ニシテ発心修行シ今西方淨上之能化ノ補処タリ。然ルニ我昔シ志ス</p>	<p>○本堂ニ大音楽ヲ奏ス。</p> <p>閻魔大皇</p> <p>〔遙カ遠ク、南閻浮提ニ□テ大法事ノ聞ユルハ、何等ノ為ノ修行ソヤ善童子金札ヲ改メヨ。〕</p> <p>善童子</p> <p>〔彼ハ、三十五日以前、黒闇天女幢ニ押込置シ罪人ノ為メニ、娑婆ノ親族相集テ、貴僧ヲ供糧シ、追善作福仕候。〕</p> <p>閻魔大皇</p> <p>〔獄率共、三十五日以前、黒闇天女幢エ押込シ罪人ヲ早々取連来レ。〕</p> <p>閻魔大皇</p> <p>〔此是ノ為ニ罪人ニ、娑婆ノ親族、貴僧ヲ供糧シ追善作福スト謂リ、惡童子鉄札ヲ改メヨ。〕</p> <p>惡童子</p> <p>〔追善作福スルト雖モ、罪人ノ為ニハ成不レ申、還テ仇トナリ候、其故ハ他人ノ口ヲ防ガン為、名聞利養ノ法</p>



ナリ

赤鬼

「疾ク去リ給エ」

観音

「鬼王ノ断ワルトコロ道理ナリ。然リトイエドモワレラガ大悲ノ万行ハ八寒ノ氷ニ身ヲ閉ジ、八熱ノ焰ニ身ヲ焦ガシ、無限ヲ住家トナシ、衆生ノ苦患ニ代ル故ナリ。タトエ、シヨウガイ・シヤカ・シハクテツブノ苦患タリトイエドモ、ミズカラ代リテ受クベキモノナリ。タダコノ罪人ヲ許セ、放セ」

黒鬼

「娑婆ノ善悪ハ淨玻璃ノ鏡ノ面ニ」

赤鬼

「イササカ争ウコトナシ」

黒鬼

「ソレ、ワレラノ姿トイツバ」

赤鬼

「慳貪ノ業鬼トナリテ身ヲセム」

黒鬼

「ミズカラ執着ノ瞋恚ハ鎖トナツテ身ヲ縛リ」

赤鬼

「三毒ハ刀劔トナツテ身ヲ切り」

処十方諸国土無利不現身種々諸惡趣地獄鬼畜生等ノ所願ニ答テ六道ノ巷ニ立住ム処ニ汝等嗔ヲ成シテ罪人ヲ追ヒ立テ来ルヲ見レハ慈眼視衆生ノ眼ニ浮テ大慈大悲ノ涙何ニ而可ト、落地獄ニレ思罪人ヲ我可レ許。先ツ娑婆ニ可レ帰思ハ如何」

鬼

「我等閑ニ奉レ拜シ菩薩ヲ外ニハ慈悲柔軟ノ相ヲ現シ内ニハ哀愍利生之情ケ御在ス故ニ雖為惡業ノ拙キ眼ニ被照ニ普明照世間ノ光ニ雖猛火熱ニ火坑變成池ノ心地発リテ有難覺候。雖然罪ヲ奉ルコト赦シ菩薩ニ不可レ叶酬困感果ノ背テ道理ニ何ソ濟ヒ給事有ランヤ。若シ然者衆生悉ク於罪無禍ノ思ヒニ可レ住ム此ヲ悲ミ豈彼ヲ憐レ耶」

菩薩

「似テ無ニ汝等情ニ娑婆ト冥途ト隔ル事実ニ拙キ罷リ也。我豈ニ彼此ヲ哀愍ニ此故ニ示現種々ノ姿ヲ示ス衆生ノ機欲ニ殊更之理大悲代受苦ノ思ヒ依レ難捨乞求トイエトモ汝等強ニ守レ偏執ヲ問可トモ叶ニ暫覺ク此ニ可ニ相待ニ大王ニ奉レ乞思ナリ」

○此時觀世音闍魔大王ノ宝座ニ行キ罪人ヲ乞求給ナリ

哀ナレバ、仇ト成候。」

闍魔大皇

「名聞利糧ノ法衰トアレハ、汝ガ為ニハ不ニ相成」

幽靈

(俱舍力)

「伝聞 俱博、婆羅門ハ風待文字ノ依レ徳、阿鼻ノ劇苦ヲ免レ、譬真実ハ薄ク共、何ゾ我等カ為ニナラザラソカナ。」

闍魔大皇

「俱博、婆羅門ハ權者ノ所謂、不レ足レ論真実吊口心ナケレバ、薰釜ノ祿ト成テ七分也、全徳ナレドモ、名聞利糧ノ不実ナレバ、七分一モ通ゼズ、早々地獄へ、逆レ」

觀世音菩薩

「善哉、我ハ六道ノ能化ニテ、

一切衆生代換受レ苦ノ誓也、大乘莊

嚴経曰、觀世音菩薩入ニ阿鼻地獄、

一切苦患不能ニ逼迫ト云リ、又経曰、

遊戲之地獄大悲代受苦ト説、

去バ、此文ノ心ハ一切衆生ノ苦ニ代

リ阿鼻ノ大域ニ入迎モ、法性ノ源底

ヲ究ムル故ニ、更ニ苦ナン、涅槃経

曰、菩薩、摩訶薩、在地獄不受燈燃

共説、是一重ニ生死ノ岸頭ニ大自在

黒鬼  
「五欲ハ火災トナリテ身ヲ焦ガシ」

赤鬼

「自業自得ノコトワリ」

黒鬼

「ナンゾコノ罪人ヲ逃ルベケンヤ」

黒鬼・赤鬼

「トク去リタマエ」

観音

「鬼王ノ重ネテ断ワルトコロ歴然ノ道理ナリ。然リトイエドモ、ワレヲ満行ノ功力大悲ノ恵ミ、日ノ照ラス時ハ、八寒ノ氷モ解ケ、大道満行ノ涼風吹ク時ハ八熱ノ炎モ消ユルトヤラ、ソノ天上一本ノ塔婆ヲ立テ、大乘涅槃ノ金文ヲ書キ鬼神応動ナサシムベキナリ。タダコノ罪人ヲ許セ、放セ」

○コノ問答ノ間ニ、舞台正先ニ卒塔婆ガ出ル。表ニ「爰入施餓鬼塔者為妙西信女仏果菩提矣」裏ニ「南無遍照金剛」トシルシテアル。

○観音、亡者ヲ連レテ下手へ退場。

○鬼クヤシガリ、奇声ヲ発シテ飛ビマワリ、ヤガテ赤鬼下手へ退場スル。

○ヒトリ残ツタ黒鬼、卒塔婆ヲ引キ抜

菩薩

「大王ニ可レ申旨アリ。大慈大悲ノ行願ニ趣ク哀諸仏如来ノ本意薩埵賢聖ノ通途也。故ニ我九品ハ池ノ台ニモ不レ座六趣輪廻ノ襪ニ立往生ノ群品ヲ利益スル哀ハ大王ノ所存ノ処ナレバ今更不レ能述爰ニ獄率等願ヲ成シ罪人ヲ押立テ来レリ看ルニ五眼具足ノ眼暗ニ四徳円満之心ヲ失ス、今度計リハ理ヲ狂テ罪人ヲ我ニ赦シ給エ。離苦得楽セシメント思也」

閻王

「菩薩ノ救済無謂レ歟。既ニ仏カモ可レ加々ス。業道如秤重者先憂無レ隠業ナリ、各々冥官ノ非レ誠シムルニ自身カ我ト自身ヲ責ム予更ニ難レ赦」

菩薩

「当テ々大王似テ無慈悲ニ有縁ノ衆生ヲ濟ハン事極本諸仏菩薩之通例也。大悲ノ至極ハ何ゾ無縁ヲ捨シ。此故ニ我一切ノ群類ヲ皆不レ濟者不レ取ニ正當ヲ誓ヲ立ル、大王争テカ此ノ願心ノ不レ哀、是非背テ法テモ罪人ヲ我ニ赦シ給エ」

大王

「菩薩ノ大悲豈ニ仰信ニ雖然、自業自

ヲ得カ故、逆縁ナレ<sup>(其)</sup>、片時モ早ク極楽ノ浄土之可レ被レ送。」

閻魔大皇

「薩埵ノ金言ナレバ自業自得果、衆生皆カ是ナレバ、自作他受ヲ不レ許、他作自受ヲ不レ許、此掟ニ任セ閻魔皇宮ヲ建立シテ、一切衆生ノ諸罪ヲ判断任。」

觀世音菩薩

「或ハ為ニ父母、或ハ為ニ男女、生ハ世々ニ亘ニ、有恩聴時ハ、此モ彼モ、仏<sup>ニ</sup>菩薩縁起同体也。大慈大悲以、我今受ニ来ル。罪業ニ究ナケレバ、濟度ノ縁モ無窮也。」

閻魔大皇

「薩埵ノ示現不レ淺、示現恵無量、早々濟ラセ賜へ。」

諸行無常、是生滅法、生滅滅已、寂滅為楽

閻ノ夜ニ、啼又カラスノ、声キケバ、生レヌ先ノ、父ソコヒシキ

仏法ハ、セフシノ引手、峯ノマツソ<sup>ツ</sup>フク路ニ、蕪ノコエ

種々重罪、五逆消滅、自他平等、即心成仏

ク。

黒鬼

「ナキ人ノ今ハ仏トナリニケリ、名バ  
カリ残ス苦ノ下露……サテハ、成仏  
イタセシカ」

○黒鬼、イイ終ッテ卒塔婆ヲ前ニ投ゲ  
ツケル。

得杲之道理難レ免薩埵ノ智見還テ  
似レタリ愚ナルニ」

菩薩

「慈<sub>レ</sub>他<sub>ラ</sub>忘<sub>レル</sub>自<sub>ラ</sub>事モ我<sub>レ</sub>昔<sub>シ</sub>ノ誓願  
依<sub>レ</sub>難<sub>ニ</sub>契<sub>止</sub>似<sub>レ</sub>タリ背<sub>ニ</sub>實<sub>ニ</sub>罪報<sub>ヲ</sub>是則  
衆生有苦三称我名不往救者不取正覺  
ノ誓難<sub>レ</sub>止、故ニ大王ノ心念<sub>ヲ</sub>モ不<sub>レ</sub>  
願言<sub>ヲ</sub>尽<sub>シ</sub>心<sub>ヲ</sub>傷<sub>シ</sub>ム。若シ此ノ罪  
人<sub>ヲ</sub>不<sub>レ</sub>救、我カ誓願モ空シカラシム。  
若シ其<sub>レ</sub>トモ自業自得ノ道理モ難<sub>レ</sub>  
背<sub>キ</sub>輒<sub>テ</sub>我カ誓願モ難<sub>レ</sub>止唯<sub>タ</sub>我罪人  
ノ代<sub>レ</sub>苦地獄ニ至<sub>リ</sub>受<sub>テ</sub>苦<sub>ヲ</sub>思也大  
王如何」

大王

「誠ニ仏モ遊戯諸地<sub>ニ</sub>受<sub>テ</sub>代<sub>テ</sub>受苦ト説キ  
給<sub>ト</sub>承<sub>知</sub>申<sub>テ</sub>候。菩薩ノ大慈悲大悲  
如来ニ等ク御座セハ難<sub>レ</sub>有覺候可<sub>レ</sub>ハ  
然<sub>レ</sub>左右菩薩ノ御計ヒニ奉<sub>レ</sub>任<sub>候</sub>」

菩薩

「善哉々々、閻魔大王我焦熱大焦熱ノ  
焰ニ焦カサレテ無量億千歳ヲ經紅蓮  
之冰ニ被<sub>テ</sub>閉無數億劫ノ苦ヲ受<sub>ン</sub>事  
全ク為<sub>テ</sub>利<sub>益</sub>衆生<sub>ヲ</sub>ナレバ敢<sub>テ</sub>少モ  
不<sub>レ</sub>傷我昔所願<sub>今</sub>者已満足化一切衆  
生皆令入<sub>レ</sub>仏道」

菩薩

南無大慈大悲觀世音菩薩」

「如何ニ獄率等汝等ニ千度百度歎キ求  
レトモ曾テ不<sub>レ</sub>免、然ルニ閻王エ再  
三此ヲ歎キ乞請タリ。早々衆人ノ鉄  
繩ヲ赦シテ我ニ可<sub>レ</sub>渡。我ハ罪人ノ  
代<sub>レ</sub>苦ニ地獄ニ往テ受<sub>レ</sub>苦大慈大悲ノ  
肌ヲ焦サン」

獄率

「奉<sub>レ</sub>問ニ大王<sub>ニ</sub>曰」菩薩大悲代受苦ノ  
誓願ニ答テ罪人ノ代<sub>レ</sub>苦ニ地獄ニ入給  
事實ニテ候歎」

閻王

「実ニ公カナリ。罪人ノ鉄繩ヲ許シテ  
頰ヤ々菩薩ニ奉<sub>レ</sub>渡」

○此時獄率罪人ヲ許シテ菩薩ニ渡ス、  
菩薩罪人ヲ請取<sub>レ</sub>驅ノ処ニ往罪人ノ衣  
ヲ乞玉フ

菩薩

「汝ハ裸形ナリ衣裳ハ何レニテ剝キ取  
ル、ヤ」

罪人

「奪<sub>レ</sub>衣婆ニ被<sub>レ</sub>呵責ニ衣裝ハ為<sub>レ</sub>衣裝翁<sub>ニ</sub>  
剝キ取<sub>レ</sub>候」

菩薩

「イデノ<sub>レ</sub> 驅ニ衣裳ヲ乞請ケ可<sub>レ</sub>得<sub>レ</sub>」

○云テ罪人ヲ驅ノ方ニ連<sub>レ</sub>行キ給

菩薩

「三途河ノ嫗ニ乞可<sup>レ</sup>望<sup>レ</sup>旨アリ、我流浪三界ノ中ニシテ恩愛ノ家ヲ出ル<sup>レ</sup>衆生利益ノ為<sup>レ</sup>ソカシ。然カルニ我ハ衆生ヲ助ケント思エトモ衆生更ニ出離ノ無<sup>レ</sup>心。爰ニ今此罪人ハ我ニ有<sup>レ</sup>少結縁ニ争カ彼レヲ地獄ニ可<sup>レ</sup>墮。故ニ閻魔大王ニ再三申乞請娑婆ニ還ス也。此罪人ノ衣装ヲ我ニ得サセヨ、着テ帰サント思ハ如何」

嫗

「何トノ玉フソ、此ノ衣裳ヲ乞請玉ハントナ、夫コソ思モ不<sup>レ</sup>依候。罪人ノ衣装ヲ剝キトル<sup>レ</sup>冥途ノ通例ノ法ナレバ、其ノ掟難<sup>レ</sup>背。菩薩ノ御願ニモセヨ叶ヒ申間敷候」

菩薩

「無<sup>レ</sup>哀モ嫗哉。吾レ大慈大悲ノ非<sup>レ</sup>行願ニ受苦ニ代テ地獄ニ入ラン、如何ナル大王ニテ御座セハ罪人ヲ我ニ赦シ与エ給ラン。如何ナル嫗ナレバ強ニ罪人ノ衣ヲ可<sup>レ</sup>惜。雖<sup>レ</sup>然<sup>レ</sup>、汝深ク惜ムカ故ニ我カ袈裟ニ取替エヘシ。抑モ我袈裟ハ三世諸仏解脱幢相之衣タリトイエトモ是ニ代テ為<sup>レ</sup>得着テ還サント思也」

○此時嫗領解シテ御袈裟ト代奉ル

嫗

「菩薩ニ奉<sup>レ</sup>向合掌シテ阿羅々々難<sup>ク</sup>有解脱幢相ノ衣ニ取替<sup>テ</sup>地獄ニ至リ代受苦シ給上ハ何ニシテカ奉<sup>レ</sup>惜<sup>ム</sup>ヘシ。背<sup>レ</sup>法<sup>ニ</sup>罪人ノ衣装ヲ奉<sup>レ</sup>帰<sup>シ</sup>」

菩薩

「(罪人ニ対シテ)種々諸趣<sup>ニ</sup>乃以漸悉令滅ノ徳ヲ我ニ有ル故ニ漸ク汝ヲ助ル者也」

○ト云テ舞台ノ中ニ座ス

○時ニ引幕ヲ引テ鬼不残内ニ可<sup>レ</sup>入

○指テ菩薩ト罪人ト舞台ノ正中ニ座シテ(菩薩ハ立罪人ハ座)

菩薩

「汝不<sup>レ</sup>知哉吾ハ是安養淨土ノ能化阿弥陀仏左脇ノ大土觀世音菩薩ナリ。汝娑婆ニ有<sup>シ</sup>時依<sup>テ</sup>他ノ勸<sup>ニ</sup>我カ形像ノ前ニ来テ礼シ南無大慈大悲觀世音菩薩誦ト一声唱ルカ故ニ我是ヲ為<sup>テ</sup>結縁<sup>ト</sup>今汝ヲ助ル者也。汝ヲ娑婆ニ還サント思エトモ娑婆ハ何処モ流転ノ欲処タリ。還テ更ニ無<sup>レ</sup>益唯々往<sup>ニ</sup>生極樂ニセンニ増シタル得益ナシ。弥陀ノ名号ヲ称レハ設ヒ雖<sup>レ</sup>有<sup>ニ</sup>地獄ニ得<sup>ニ</sup>生極樂ニ四重五逆ノ罪人モ一声弥陀ノ名号ヲ唱レハ必引接シ結

<p>菩薩練道</p>	<p>(二十五弁祢り供養かの罪人救助のま なびあり)「本朝俗諺志」二の卷廿二 「下総鬼堂」の条(下)。現在癡絶。</p>	<p>○此時諸菩薩音楽ニテ極楽引接ノ躰也。是レ脚リ供養ノ儀式ナリ ○罪人入報土ノ時本堂ニ安養界ヲ莊嚴シ正中ニ新生ノ菩薩ヲ蓮花ニ令レ座菩薩達ハ左右ニ例シ導師ハ高座四奉諸弥陀經念仏回向</p>	
		<p>何況ヤ至心ニ唱シテ。今本師阿弥 陀仏ノ名号ヲ可レ唱斐定可シ往生ニ ○此時罪人引声十念ヲ可唱也 口伝 ○観音勢至罪人ニ天衣ヲ与エ給テ 觀世音 「我レ汝ヲ西方淨土ニ送リテ後還テ 為レ汝ヲ至テ地獄ニ受レ苦ヲ。我レ地獄ニ 至ルトイヘトモ十方諸国土無利不現 ノ身ナレハ頓テ汝トトモニ極楽ニ居 シテ平等施一切同登菩提心ナラン。 抑此天衣ハ願カ所成ノ天衣ナリ、汝 ニ是ヲ与ル法侶装衣競来着証得不退 入三賢」</p>	